

第17回「文芸思潮」現代詩賞 発表

第17回「文芸思潮」現代詩賞

最優秀賞

第一七回「文芸思潮」現代詩賞に多数の御応募をいただきまして、まことにありがとうございます。おかげさまで二九九名の方から七三二篇の作品を「応募いただき、充実したコンテストとなりました。心から御礼申し上げます。五月末に集まった応募作の中から、まず選考委員会予選担当によって第一次予選、第二次予選、第三次予選の選考が行なわれました。それらを通過した作品を対象に、十一月七日、渡辺みえこ、五十嵐勉の各選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定しましたので、ここに発表させていただきます。

今号には最優秀賞・優秀賞を掲載させていただきますが、奨励賞作品も、次号以降できるだけ「文芸思潮」誌上に掲載させていただく予定です。

授賞式は、残念ながらコロナウィルス流行の影響により今年も見送らせていただきます。賞状・賞品・賞金などは明年一月下旬までに直接受賞者に発送させていただきます。

第一八回「文芸思潮」現代詩賞は、明年も同じ要領で募集を行います。どうぞ奮って御応募ください。

「文芸思潮」現代詩賞選考委員会／文芸思潮

優秀賞

- 「ワラベ歌」「人のしまつ」
- 「時のかたまり」

中原賢治 (岐阜県岐阜市)

- 「うむという」「昔日」
- 「くるまれているということ」

橘いずみ (島根県出雲市)

- 「終」「老」「死」

麻生ゆり (愛知県豊明市)

- 「オアシス」「火の見櫓」「クローク」

妻咲邦香 (長野県北安曇郡)

奨励賞

- 「きんじ、する」

- 「顔認証訴訟」

- 「飽食した蜘蛛と法悦」

ヨクト (神奈川県横浜市)

- 「死の匂い」「虐待の記憶」

佐藤 裕 (神奈川県横須賀市)

- 「入出力波形観測結果」

加藤光哉 (北海道苫小牧市)

- 「観念豪雨警報」「フルグレインマッシュパンバター死神」
- 「純情キラーサイコビッチ」

岩尾宏紀 (福岡県北九州市)

- 「地下坑道」「地下鉄のヘミングウェイ」「氾濫の後」

松本昂幸 (東京都世田谷区)

- 「昇天」「熟れる日きよら」「風の惑屋」

福永十津 (埼玉県越谷市)

- 「美しく青く」「秋風」「夏の夜の夢」

一橋省吾 (埼玉県さいたま市)

- 「また 青葉若葉の季節」「残り火が唄う」
- 「海と雨の間で」

遠藤芳子 (東京都狛江市)

- 「雨音」「枯葉」「根」

薬師丸怜央 (茨城県取手市)

- 「女の家」「田園」「骨の魚」

桐ヶ谷忍 (東京都江戸川区)

- 「砂糖をまぶしながら」「殴る、蹴るの暴行」
- 「薬玉と赤飯」

野葛間 (長野県上田市)

- 「動かない水」「チューリップ」「いのり」

中村郁恵 (北海道札幌市)

- 「虹彩」「極彩色」

インバ (奈良県奈良市)

選評

詩への情熱

渡辺みえこ

第一七回文芸思潮現代詩賞の応募作品は、様々の個性があり、それぞれの形式の中の詩への情熱を感じた。エッセイや小説でなくなぜ詩か、という問いに、フランス二〇世紀前半の詩人ポール・ヴァレリーは有名な言葉を残している。「散文は歩行、詩は舞踏」と。さらに舞踏について「あらゆる酔いのなかで最も高貴な酔い」と書いている。選ばれた研ぎ澄まされた短い言葉の中に身体的リズムや拍動、押し殺した叫び、想念……などが包含され、詩情を通して著者と読者が共有できる場が作られる。

最優秀賞のヨクトは、現在ほとんど世界中の人々が見舞われている電脳空間に生きる〈私〉の緊張感を形式も含めて表わし、スピード感と危うさが、その実感を伝えている。近代詩では、様々な実験がなされてきた。一九二〇年代のアヴァンギャルドは過去の規範に反抗する芸術表現として、未来派、アナキズム的なダダ、表現派、視覚派……等、音楽、美術、舞踏、演劇、また書道、華道なども含め

押し寄せてきて、幾重にも屈折した言語が詰まっている。そのぶつかり合いは新鮮だが、一行の飛躍が多すぎて読者はイメージを掴みにくい。一編で何編かの詩ができると思う。もう少し緩やかに言葉を運んで三連目ほどでイメージの山が来るとよい。

中原賢治の「人のしまつ」は、豊かな感情移入で「あなたの経験に寄り添って、危機感と悲しみが迫ってくる」「この子の命あるところまで」は、命ある限りという意味がもう少し簡潔に伝わる言葉を。「ワラベ歌」は「若草の匂いがする黒髪」というような常套句には気を付けたい。

絵画では長い間石膏デッサンの基本訓練をして、物を自分の目で見るができるようになってから、その観察描写を超えて創作していく。そうすれば概念的、観念的になりにくい。物は空間によって、光の当たり方などが変化する。そこにいるその女性をよく見れば、もつとその人だけが持つ「髪」が見えるのではないか。

奨励賞の中村郁恵「動かない水」は、水の一滴をよく観察描写している。水との対話によって、二連では、言葉に表出しきれない己が内なる声を象徴して巧みだ。「チューリップ」は、花の観察に人間生活への比喩の移行が滑らかなるために、もう少し詩行が必要だろう。「長さの違う人差し指が2本」が唐突でイメージしにくい。

加藤光哉「入出力波形観測結果」は、人がすでにサイバート

た総合的抵抗運動だった。さらに一九六〇年代には、視覚詩、音響詩やパフォーマンスなどのインターメディアアートも行われ、芸術による体制変革の契機も作った。前衛作品の実験は、時代の危機状況の中でなされ、それは時代に対峙しながら新しい形を創っていく、その後の芸術形式も変えていった。詩は言語芸術として出発しているので、自己と世界との関係を言語で見つめて深化させていくことによってそのフォルムが作りだされるのだろう。

八連目の「いつへ」は、いつという指示代名詞につながる言葉に、例えば、やってくるのか、なくなったのか……などにつながる言葉にすると流れがスムーズになる。

優秀賞の妻咲邦香「火の見櫓」は、異質な種類の言葉の結合が、その裏に隠されている多くの言葉も含んで、新鮮で強い思いが伝わってくる。最終連のイメージにもつていくには前の連に伏線を入れるとスムーズにつながる。「オアシス」は出だしが甘い。「クローク」は「待つて 行かないで」が情緒的、生まで浮いてしまうので言葉の流れ、調和に一考を。

橘いずみ「うむという」は、産むこと、産まれることが重なり、身体経験の人知を超えた事柄を「つまらなさ」「眩しい」などという相反する言い方で迫ろうとしている。この主題は、続けてもつと書けるのではないか。麻生ゆり「終」「老」「死」は、書きたいことがたくさん

クノロジーに身を任せてしまっている危うさが伝わってくる。十九世紀、ゴシック小説に、自分が生み出したものが自分を破壊する怪物だったという物語がある。イギリス人メアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』である。もう後戻りはできないと思われているサイバートクノロジーが、人を豊かにするものか、破壊に向かうものかは、今後もみつめていってほしい。

松本昂幸「地下坑道」は、人間の心の底に眠る暴力、悪への問いを「地下坑道」の描写から始めたのは良い。

村上春樹の『アンダーグラウンド』は、地下鉄サリン事件での、被害者へのインタビューが元になっているのだが、東京の地下、人間の深層意識の暗闇（村上の言葉ではヤミクロ）が、恐ろしいほどに重なった悲劇である。

「地下坑道」では、一連から四連までの坑道は物の描写で、即物的で良い。その後の友よ、以下五連から八連までは、説明的で人道主義の類型になってしまっている。個人的体験を書くなど少し工夫がほしい。「地下鉄のヘミングウェイ」も同様な設定で強い詩行が展開されている。ヘミングウェイに強く寄り添っているが、自分の経験として書いてもよいのではないか。

佐藤裕「虐待の記憶」は、存在の不安、痛みが様々の具体的な形で表わされている。一連目、上半身を切り取られたのだが、「何を喪失したのだろう」という不可知論的問

いはいい。五連目の「深い深い」、「遠い遠い」の繰り返しは、二語目が、弱くなるので違う言葉で言えないだろうか。野葛間「砂糖をまぶしながら」は、男装文体、ブラックユーモアの物語詩として現実感がある。もう少し書き込んで長編の物語詩としての展開もできるのではないか。

遠藤芳子「また 青葉若葉の季節が」は「青葉若葉」が常識的だが、それを打ち破る反語が続き複雑さと深みをもっている。

薬師丸尨央「雨音」、「枯葉」、「根」は、ねじれた言語の組み合わせに、苦悩の状況が伝わってくる。感覚的言語が豊富で息詰まるような展開で読者を引っ張っていく。救いが見える箇所があってもいい。

インバ「極彩色」一行目は、梶井基次郎の『桜の樹の下には』を思わせるのでないほうがよい。二連目の外界描写から三連目の身体の中に入っていく転換は良い。四連目の「空虚を満たす漆喰の郷愁」などは観念的な比喻で中心がぼけてしまう。「虹彩」は、「描かなければ 描かなければならない」と追い詰めていく言葉の堆積は迫力があつてよい。キリスト教の神に限定すると狭くなるので、一般的な信仰でもないのではないか。

一橋省吾の「美しく青く」という言葉は、著者の大事な概念と思えるのだが、



渡辺みえこ

わたなべ みえこ

日本女子大学、文教大学など元大学講師。創作技法論(詩)、日本文学講読。詩誌「いのちの籠」同人。日本現代詩人会、日本詩人クラブ会員。2009 第59 回日氏賞詩集賞選考委員。2015 第47 回横浜詩人会賞選考委員長。詩集『耳』詩学社 1972。『喉』思潮社 1982。『声のない部屋』思潮社 2001。『水の家系』南風プレス 2002。『空の水没』思潮社 2013 (第十回日本詩歌句大賞受賞)。文芸評論『女のいない死の楽園—供犠の身体三島由紀夫』バンドラカンパニー刊 現代書館発売 1997 (第一回女性文化賞受賞) など多数。

ナルシズム的陶酔を含んでいる。ポール・ヴァレリーの「舞踏」の「酔い」は、散文と対峙させているが、身体訓練の後の、他者(読み手)の視線の中に立ち、他者をも酔わせる言語文化である。「恨んだりしても 人のせいにはしない 美しい図式」というような言い方は、率直だが、道徳的説教に陥らないように抑えて、「記憶の骨格にちらばる脊髄が/窓からわずかに溶接され」などのように比喩にすると広がりが出る。「しんぎん」「せつな」などは故意にひらがなにして強調しているのだと思うが、呻吟、刹那などの象形文字の方が、イメージが湧く。ひらがなは音声の短歌的伝統が強いが、現代詩は、西欧近代思想の影響があり、明治期に西欧文化概念を漢字で翻訳した多くの熟語は、簡潔に思想を伝えることができる。

佳作

- 「象と少年」 「わが友」 吉井 裕
- 「新聞配達員」 田中浩司
- 「黒うろ夢」 「バス」 「晩秋五色」 北原 満
- 「母の握り飯」 「ふたりの恋路」 「出会と別れ」 倉沢辰子
- 「あくがる」 「御破算」 「なまずのうた」 試金
- 「アニミズミストの妄想」 「ラハイナヌーンの影」 貝塚マナ
- 「ぬけがら」 八番目の兎
- 「命日」 「花を冷凍する」 「斜陽」 相模 透
- 「矢車草」 池山弘徳
- 「南洋通信」 「旅立った君の朝」 「隠れん坊」 上木戸晃
- 「優しい手」 「野の小道」 「かけたしの愛」 正木ふゆみ
- 「焼却炉」 「キイロのボール」 「がたん、ごこん」 すみれ
- 「辛夷」 西條由美子
- 「む怒」 七羽鳩子
- 「おたがい落とし」 「ヒトラハヴト」 横山 誠
- 「すべてをふくらませる歓喜風」 田村全子
- 「白昼夢」 橋木正午
- 「悪魔」 「彼女に靴を」

- 「絶対性理論」 「地球人の未来」 「二休さん」 竹村 啓
- 「祝魂歌」 「0点回帰」 隅田聖美
- 「夜に埋まる」 「雪2019」 「天のはからい」 渡辺八畳
- 「雀」 「悔恨」 「大学教授」 森部英生
- 「もがきながら」 三浦恵子
- 「獣と花」 「三月十一日」 「羽撃く」 小山桜子
- 「唄の子の唄」 「花いちもんめ」 姜 龍一
- 「悦び」 「おぼろ」 「薪」 佐藤幹夫
- 「白骨天使たち」 「モノクロよ僕の掌中でお」 後藤敏斤
- 「真昼の星」 「64G」 「潮の磔」 安堂
- 「銀杏」 「悲しみ」 「分裂思考」 山下一步
- 「空き家」 「小さなエリー」
- 「化け物共の夜—幻覚の記録として—」 天ヶ谷麗
- 「恍惚の世界のはじまり」 「光」 「歯車」 めちこ
- 「無仏蟻紀行」 久利潤保
- 「魔女のエチュード」 「ノロジカ」 「嘴」 奥間 空
- 「四季」 「殻」 山口たおず
- 「涙だったかもしれない」 「夏の幻」 てづかかなこ
- 「透明感を大切に」
- 「永遠」 「叢書」 「解放」 東風佳子
- 「風化」 「幽し合わせ」 「深閑の音」 愛羽 文
- 「温度」 「海」 「きれいな円が描けなくて」 はんのよしえ

佳作

- 「見えない笑い」「夜の楽園」「対岸の世界」 富田実加子
 「虫」 新里 輪
 「異臭のことなど」「西南の眺め」 陸離
 「王の墓に入れるもの」 悪客しり
 「八月」「あめあがり」「月」 藤野 行
 「哀願」「春―ダンス」「司祭の告解」 高橋蒼太郎
 「叫び」「夕刻」
 「倒れゆく馬をみた」「いつかまたふりそぐイヌたちへ」
 「追憶を燃やし舟を流す夜に」 帆場蔵人
 「腐れ縁」「独立・触れないで」「結合」 河合麻衣
 「螺旋」「渴き」 十路田道広
 「ニセモノ」「ぼろボロ」「凍える焔」 絹本ゆい子
 「風と雲と会う」「慈悲」
 「たてまえ・うしろだて・洞ヶ峠」 松藤智会
 「川本 舞」「百合が枯れる」
 「インスタントラーメン」 睡眠
 「海」「ヒマワリ」「憂いの春」 義若ユウスケ
 「十月」「空腹」「掌」 五十月彩
 「トビアス」「撃つ」「犬」 nostalgia
 「夢幻の世界」「垂れるグラス」 赤津将大
 「小石を持った少年」

- 「Yokohama Sight」 「Stardust of Yokohama」
 「Breakfast with the Slug Reversed」
 「Stardust of Yokoh」 「Breakfast with the Slug Reversed」
 「血を流す馬」 「湖と旅人」 「草叢のドクダミ」 鳥ノ海開
 「月光」 「春風」 「神秘」 浅見龍之介
 「郵便」 「夕暮れの波間」 「秋II」 早見 玲
 「僕らが射ころした猪は」 「後悔の舟」 舟橋令偉
 「地の果てまで地割れが、あるいは群体/軍隊としての手振りが」 渡部榮太
 「このノート」「花明かり、春風」「彩り」 横須賀聖太
 「あるていめつとどくにんじん」
 「ホーム」「イの有様」 あぜ
 「保健室難民十七歳」 雪飴さきい
 「漆黒の天空」「野うさぎよ」 井上遠遊
 「聖観音―薬師寺」 「十二神将―新薬師寺」 清水一美
 「敬老会」 「レモン1/2」 「Winter Night」 半田一緒
 「膚虜」 「湖畔にて」 野崎眞由
 「ウィアードランドの詩」 「DとRの会話」 このみのこ
 「暮方群小」 「夏ひと日」 「烏合」 葦刈柑芍

新鮮な顔とベテランと

五十嵐 勉

今回の現代詩賞のトップグループは半分がニューフェイスであり、半分がベテラン組で、いい取り合わせになった。新鮮な顔と実力グループの両方が調和して、全体の色彩バランスが整った。

特に最優秀賞は、内容も形も挑戦的で、現代詩賞にふさわしい野心作となった。ヨクト氏の「きんじ、する」「顔認証訴訟」「飽食した蜘蛛と法悦」は、電腦時代でなければ生まれてこない意欲的な作品である。昨年柏原宥氏の「デジタルトランスフォーメーション」の詩は、現代の危うさをコンピュータ内部の不協和音と不安から告発したが、今年のヨクト氏の詩は、それとは対照的に統計やグラフや解析の外部の歪さから告発している。コンピュータ内部から覚える危機は、不安だけが吹き起こるが、この外部の歪みから覚える危機は、もう少し余裕があり、未来への希望も舞っている。ここにあるのはむしろ数字化の危機というべきかもしれない。ヨクト氏は数字ではない何かをしつかり見据えている。「平均への絶えまない墮落」という表現にその根拠がはっきりと示されている。「近似されるまえの／生々しいあのこえはどこへ」という言葉にも、

信頼を呼び戻そうとする衝動がある。ただ、歌い舞っているそれは、果たして真の懐疑と告発に繋がっているのだろうか、浅いところで留まっていけないだろうか、という危惧は湧く。微妙に切っ先の浅さも感じる。今後どのように発展していくか、期待を込めての最優秀賞である。

優秀賞は今回四人で、まずベテラン組から触れていこう。麻生ゆり氏は連続七回の奨励賞受賞者で、最近特に詩想に深まりが見え、私は三年ほど前から優秀賞に価すると思っていたが、もう一人の選考委員の認識が低く、不運が続いていた。今回はさらに、内容も深まり、技術も洗練されて、豊かなものになった。実力を発揮しての受賞である。心から祝意を贈りたい。ただ、少し気になるのは、「終」「老」「死」と、あの世への三連発のようなタイトルの並べ方で、希望とは逆の方向へ著しく傾いていることである。これだけの詩を作るのなら、未来の方向へも力強く踏み出せるはずである。次回はそれを期待したい。

中原賢治氏も応募歴は長く二度目の優秀賞である。この詩の言葉は平明で、捏ねた表現や難しい言葉遣いは何もない。現代詩の手法とはむしろかけ離れた様相を呈している。しかし、今回はその平明な言葉の中に、深く迫る思いがあった。「人のしまつ」は老いて捨てなければならぬ者への痛切な哀感に満ちている。万難を乗り越えて生きてきた者の、命を守り通してくれた者の、その深い恩の海をも捨

てなければならぬ訣別は、命の宿命として胸を撃つてくる。もっと完成度を高めれば、さらにすごい結晶となったかもしれないという希望を伴った受賞である。

ニューフェイスの一人は橋いずみ氏で、それほど難しい言葉は使っていないのだが、逆にそのシンプルな言葉遣いの奥に、ハツとするような鮮烈な煌めきがある。この白色の閃光的表現が、夜明けの清潔な白さのように世界を広げて見せるところが斬新である。こういう妙味は、造ってなかなか出せるものではなく、本来の白い性向を元にしてこそ生み出されるものだろう。この持ち味を大事にしてほしい。変に技巧を得ようとする逆に進んでしまふ、純潔の色がある。

対照的なニューフェイスが妻咲邦香氏である。言葉とイメージの繋がりを飛躍させ、投擲の距離を延ばすことによって詩を膨らませる志向は、鍛えられたかなり高い技巧を見せている。アンバランスさをむしろ跳躍力にするその造形はパッチワークの構成美を重ねていく。それは色彩キユービックとなつて、確かに屹立する。しかしどこか空中楼阁や巨大なケーキのように、数日経てば消えてしまう幻想の弱さを帯びてしまつてゐる。また、ところどころ弱い表現が蝶番ちょうつがひの接続部分を虚弱にしている。その点、不満があり、もっと腰を据えた建築の強固さが欲しいし、詩そのものへの態度の強さが欲しいが、これからまだ伸びる部分

が期待できそうなので、それに賭けた。知と意志の強化を望む。

奨励賞は、個性が咲き乱れている観があつて、これも一つの豊饒である。

桐ヶ谷忍氏は何度もこの奨励賞を取っているベテランと言へるが、今回も鋭い発想で圧倒される個性を感じた。「きれいな人形の生首が咲く丘で」という出だしがすでに尋常ではない。この恐怖を呼ぶ発想は、日常の生温いヴェールを引き剥がす鋭い刃を備えている。切れ味はあまりに強烈で、すべてを根底から覆す迫力を持つている。ただ、この強烈さが、生温い世界に安住する人たちに拒否される過度な効果をもたらすことも否定できない。桐ヶ谷氏は明らかに才能があるが、この才能はむしろ小説など散文の世界の方が生きるかもしれない。

一橋省吾氏は、その詩の技巧を外界への爆発として最高度に放つてゐる。これは技巧ではあるが、内部に爆発させなければならぬ必然的なマグマを伴つていて、その力は破壊をも呼びかねない痛切な表現力となつて、夜空の壮麗な花火のように散開している。私はこれを評価する。詩とはこういうものであつていい。叫ぶべきものがある。ところどころ月並みな表現も混じつてゐるが、何よりも放つべき内質のマグマを持つてゐる。さらに爆発させて欲しい。この一橋省吾氏の詩は、私は優秀賞でもいいと思つた。

入選

- 「Forever」 「花束」 「あの子」 有澤かおり
- 「命の河」 「PLEY BACK (ちよつと違う人生)」 諸井博行
- 「生まれてから」 宇川マル
- 「心の足跡」 「花のはなし」 宇川マル
- 「正」 「smile」 「walk to smile」 「natural sky」 Rosy
- 「私にくれ」 「セント・エルモの火」 「モドキ」 飯干雅作
- 「足音」 「今」 はしのぶしげ
- 「嫉妬の灰色の炎」 「ダマスクローズの朝露に濡れて」 三月月季衣
- 「空色茸」 「36.5℃」 谷町蛸蛸
- 「風が辿り着く場所」 「海辺」 安田 覚
- 「寵愛」 「よこたわる記憶」 「風鈴」 惟村来帆
- 「青い歯車」 羽鳥結人
- 「猫」 「朝」 「死神」 水沢朱実
- 「煌めく闇」 「早」 八潮 夏
- 「聖又ヌギ」 「暦」 「ストーカー」 上下
- 「大群の鳥」 「朝早い電話」 「感覚の方向」 横井純子
- 「デパートがあつた風景」 「大豆から」 「双葉」 村上文緒
- 「忘却」 「愛」 「本当の居場所」 内山健太
- 「あれよあれよ」 「お口の中」 當島伊織
- 「サンセット イン アフリカ」 「深い霧の中から」 松原泰子
- 「ニャンジャ族の女たち」 静川雅史
- 「杭を打つ」

- 「朗読のための朝」 「午前感覚」 「幼年時代」 齋藤圭介
- 「藍白」 「論」 御嵩伊蔵
- 「キャンディの棒に眼球を」
- 「ポイ捨てが一人の人間の思考を蝕むなら、それは大罪でしょう」
- 「僕は舞台に立ちたいんです」 王子真瞳
- 「魂と重量」 「水を通過して」 「北へ」 星野瑞紀
- 「ミメシス」 「春の胎児」 「洞に棲むヒト」 七まどか
- 「硝子の糸」 「叶えられない祈り」 「焼き払う」 高倉麻耶
- 「黄金の肉、銀の酒」 実川阿仁
- 「スタートアップ」 「ガシャボンと百エン玉」
- 「消しゴム社会」 小堀弘樹
- 「人類の退化」 「群青の泡」 「こめかみに梅の花を」 星壁まひろ
- 「お前が欲しい」 「魔王よ」 「恋人の眸」 原水
- 「愛の名前」 「お菓子くなきや」 「神社」 無鳴クモ
- 「基礎力」 「普遍」 「出発点」 全体俯瞰
- 「プロファイル」 内山ヒロユキ
- 「躁鬱ダイナソー」 園ヒビカ
- 「たねまき」 「さやえんどう」 「あべつくさやえんどう」 いまだまりこ
- 「癖」 「青春奉唱」 石川 新
- 「デリリウム」 「繋いだ星座は綻び、微塵に砕かれ海に還る」
- 「器から零れるほどの塵と屑を星に変えたのち、ひとつずつ繋いでを繰り返し君へ捧ぐ」
- 「かねしろ茉衣」

福永十津氏は言葉の構築はハードでいいし、「風の惑星」など、漸増の映像美を利用しての表現も効果を発している。ただ、言葉の流れが、ギクシヤクしていて、感情の流れをやや阻害している。名詞止めの多用に起因している面もあるが、流れそのものをあまり意識していないところにも原因があるように思える。これを乗り越えて音も詩想も流れるようになると、大きな飛躍が期待できそうである。野葛間氏は、変わったペンネームで古風な趣を感じさせるが、詩の内容は強烈で、このような冷笑的な眼差しを込める表現は一体何なのか、興味をそそられる。詩に恨みや復讐を込めているかと思うほどの烈しきで、こちらにもグサグサ突き刺さってくるだけに、呪い人形のような世界さえ感じる。しかしそれによって響いてくるものは確かに響いてくるので、詩としての曲は伝わってくる。「殴る、蹴るの暴行」などというタイトルは数千の詩を読んできた私も初めてで、これだけでもインパクトがある。この衝撃性は、桐ヶ谷氏と同じように、一度は散文の表現によってもっと広がり構築性を持ちそうではある。噴出するべき内部の火山の胎動は感じる。

葉師丸怱氏氏は、今回は奨励賞に甘んじた。スケールがやや縮んでいるのと、ぬるい表現が目立つのとで、評価を下げた。「雨音」はよく書けているものの、このこというところの盛り上がり欠け、やや閉じこもり気味になっていが見られて、ただだけない。この歴史へのアプローチは持ち味には違いないものの、詩としての自我の爆発をどのように入れ込み、どのように融合させるかは、まだ完成の域には達していない。経験してきたものは確かにありそうなので、大風呂敷を広げる方向ではなく、微分の中に結晶の煌めきを敷衍する方向を目指してほしい。

お馴染みになった中村郁恵氏の詩は、今回「動かない水」など着眼の目新しさだけではなく、透明感を擬人化した新たな領域を提示した。これに、風景や静物の触感だけでなく、生命のダイナミズムが付与されればもっと大きく詩が動き出すと想われる。過渡期にさしかかっているこれをどう乗り越えて一回り大きくなるか発展が楽しみである。

インバ氏の「虹彩」は、出だしが梶井基次郎の「桜の木の下には屍体が……」をすぐ連想させるので、すでに失敗。既存の作家・詩人に寄りかかるとは厳禁。繰り返しが多いのも作品を弱くする。情熱は強く感じるので、表現を磨いて結晶度を高めることよつてもっと詩の華を咲かせて欲しい。漢詩の精髓は志と言われる。私は現代詩にも高度になればなるほどそれが求められると思う。

今回も詩の華花の繚乱を見ることができた。地の苦悩を天上に昇らせ、夜空の華と咲かせ、星の永劫の輝きとして煌めかせるその営為が、さらにこの世に続くことを心から祈りたい。

る。大胆で広大な展開が欲しい。

佐藤裕氏の詩は「飛び跳ねる 胴体のない獣」や「上半身を切り取られ/足だけで歩く女がいる」など強烈なイメージを出してくる激しさはいいが、それが収束地点でやや失墜気味になる弱さがある。これをどう盛り上げて全体の昂揚に結び付けていくかが課題となる。

遠藤芳子は今回も愛息の死をモチーフに高らかな永訣を歌いあげている。「また 青葉若葉の季節が」というタイトルは、「青葉若葉」が重複気味であるため、結晶感がぬるいが、「緑に染まった光にきみを感じる」という自然への命の溶け込みは共感として普遍性がある。

「入出力波形観測結果」の加藤光哉氏には、原稿用紙一七枚のボリュームといい、その表現の形といい、野心を感じる。その挑戦はいい。このようにして若さをぶつける姿勢は評価する。しかし出だしが安易だったり、途中に宮沢賢治の詩を挿入したりするのは、味消しで、せつかくの挑戦が損なわれる。また理科系の言葉で閉じているところもあり、機械の世界から外へ出て行かない堂々巡りの部分も散見する。これも怒りや疑問を感情に乗せて爆発させる思いとしての流れが必要だろう。

「地下鉄のヘミングウェイ」を書いた松本昂幸氏は、革命や政変の匂いを充満させて歴史を含む劇性があるが、タイトルに「ヘミングウェイ」を持つてきたのは、寄りかかり

木内是壽
ユダヤ難民を救った男
樋口季一郎・伝



ア経由で満州に逃れてきた2万人のユダヤ難民を、命を賭けて救った日本人将軍がいた。ハルビン特務機関長樋口季一郎少将。敵軍の中で死に瀕したユダヤ難民を人間として救済した英傑の軌跡を辿る歴史評伝。

アジア文化社

1540円(税込/送料共)
御注文はアジア文化社まで



五十嵐 勉
いがらし つとむ
1949 山梨県生まれ
79「流瀆の島」で群像新人長編小説賞受賞
98「緑の手紙」で読売新聞・NTTプリンテック主催第1回インターネット文芸新人賞最優秀賞受賞
2002「鉄の光」で健友館文学賞受賞
他に中篇小説集「ノンチヤン、NONGCHAN/聖丘寺院へ」長篇「破壊者たち」戯曲「核の信託」など

きんじ、する

マウスにのせた掌が融けて沈み
固体と液体の間でねじれた平面に描かれた
表計算のグリッドが無作為の重力で歪むとき

プルダウンからグラフを選択する
棒グラフ 円グラフ 散布図 レーダチャート バブル
数値化された〈私〉は

折れ線グラフ

隆崩 転起し 生腐する 乱雑な浮浪と
切れおちた深い溪谷

ヨクト

つもる百花に香りは一粒もない

マトリクスの原点は待ちぶせていた確率

無数にある点と点より一つ少ない線分は委縮してゆく緒の断片で
終端は用意された偽りの碑銘

意味を失った窪みを泥土が埋める

香炉に零れる雨をあつめ方眼紙をなぞると
夜と昼の星座すべてが

一筆書きでつながり始まりも終わりもなく
東でも西でもない悲劇

あるいは、球面を進む饒舌で空疎な乱数の哭き男のいない葬列

迷路に転がる糸玉となった〈私〉の世界史
を

解きあかす衝動にかられ

ひとすじの線を加える

きんじ、する

マウスのボタンを押した瞬間

すりきれた聖典にしみ込んだ指紋

の平坦化

または

〈私〉の歴史修正

単純な軌跡は右肩あがり、いや

右膝崩れ

平均への絶えまない還元という墮落

曲線が浮彫にする空虚は

私の実在との残差は

それは、いったいなにごと

しかも、その二乗和を最小にするとは

量を削りとられた点を結ぶ幅のない線分

微視の〈世界〉で、そこに拍動する〈彼〉の

決して同じ様相のない四苦八苦の無量のうちで

離散から連続に化生しスケール変換に不変となった〈彼〉が

腕をくみ増殖するコッホ曲線は

両端をひくと

無際限にのびつづけ

懈怠と修羅の記憶を縦横に刻印する

点

に記された地図

を

〈私〉はいつまでもよみとこうとしている

近似されるまえの

受賞の言葉

ヨクト

初めての詩は、うまれた時の発語だったと思う。明確な語彙ではないが、身体や感覚、意識や世界が混然となった心から幸せな声。それは、他者や社会と自己との心地よく美しいもつれ(弦)。だが時は残酷だ。弦に滲みた言葉を読みとく蓄音機は、愛や希望だけではなく、叫喚や憎悪さえ響かせ回り続ける。ひび割れ棘も浮きでる弦は、鎖や鞭、鉄条網にすら変容する。目を瞑り丸まれば世界はましに見えるかもしれないが、立つ者は膝を折るかもしれない。華やかな言葉で飾られる世界もあれば、言葉にするには不快な世界の真実もある。目蓋の裏の文字をよむか、見開く水晶体の傷をよむか。二月から現代詩に取り組み始めた私は、後者を選ぶ。五月の挑戦は、眼前する世界の風変わりなプリコラージュ、定型の散文詩、分裂と断絶、抒情の希釈とナラティブ、多声……その可能性を評価くださったことに心より感謝申しあげたい。

ヨクト
北海道生まれ。早稲田大学大学院経済学研究科修了。神奈川県在住。リサーチャ。

きんじ、する

生しいあのこえはどこへ

〈あなた〉の純粹はいつへ

諦めることに慣れていない

〈あなた〉の灯の消失は〈世界〉の輪郭を臙にする

危うい〈われわれ〉にはなむけを

曲線が予言する無地の真空

は

復興のエナジを取りもどしただろうか

自由意志が絶対法則に立ちむかう剣を鍛え佩く

サイエンスにまさる空想をうたう者は帰還しただろうか

歪んだグリッドをマウスが集まり修復する

いつのまにか眠っていたようだ

ひたいにのこる QWERTY

あけた窓に流れこみ、肌をきる

冷大気をゆく東雲をみあげ

私の辞をうつ

うむとらう

橘いずみ

何か生もうと縮こまるとき
 わたしはわたしでなくなり
 一切の
 光は奥へと集まって
 そこにひと欠片さえ
 わたくしの力などありはしない
 何か生もうとするときは
 たれも洞穴に過ぎなくて
 そのつまらなさに慄きながら
 けれど
 その身の薄ら寒さが



浅はかなわたしであることが
 日の出のように
 眩しい
 溶けて無くなるだけの
 つまらないわたくしが
 眩しくて

いざ生まれるとき
 わたしは一切のわたしを
 刻んで
 痴れるのだ
 光の
 ただ自らを
 生み落とすとき

橘いずみ —————
 たちばな いずみ
 学生時代より自費出版を始め、以来詩集の刊行の他、脚本、歌詞、詩のワークショップなど
 2019 資生堂 web 花椿 コンテンツ「今月の詩」にて読者投票第一位を獲得
 翌2020年1月、花椿文庫「煮魚を齧る」刊行

受賞の言葉

橘いずみ

第17回「文芸思潮」現代詩賞優秀賞受賞、光栄に思います。詩に達するには、と考え続け、この一年はこれまで以上に辛く感じ、また同時にそれが嬉しくもありました。掴めないことを思えば思うほど苦しくなる一方で、掴めていないという自覚に安堵する。そういう時期に、こうしてひとつ形となってくれたこと、とても心強く感じます。これからも一つ一つ、足りないものに気付いていけたらいいなと思います。

火の見櫓

妻咲邦香

第17回「文芸思潮」
現代詩賞
優秀賞

引き潮の揺り籠に赤子が眠っている
 滲み出た泡の粒と鼻をつんざく酸化した匂い
 長い間発酵していた
 項垂れて一本だけ伸びた毛の朝
 賢いと呼ばれた者らの戸惑いが
 不吉な夜を食む
 逃亡を企てるものの蓋などあろう筈もなく
 ただ喧騒と競合に明け暮れ
 憐れな鷺は灰汁を飲む
 肉は甘い
 何故ならそれは内側に向かう閃光であり
 ただ一度形容された後は
 外周の線上から疑念を以て迎えられるのみ
 余程の仲でもない限り弄ぶなかれ

「項垂れて一本だけ伸びた毛の朝」

遠吠えにて呼び寄せる朝が
 何処かで燃やされている
 眠りがとぐろを巻きながらも
 その廃液が宙に滴るのは時間の問題で
 そこに幾千もの敵が眠っている
 代謝さえ収まれば年月の手解きで
 丁重に保管されるというのに
 満ち潮に剥がされし者らの吐く息が
 何れ誰かの住処となり
 私に僅かでも土を与えてくれたなら
 なのに王よ
 そなたは虫の姿にて
 自らの唾液に脅かされ
 干からびていく
 今日は何処が燃えている？



妻咲邦香

つまさき ほうこう
 1966 岐阜県各務原市に生まれる
 岐阜県立岐山高等学校卒業
 2017 信州安曇野池田町にて手作り専門の洋菓子店を開業
 「手作り菓子工房 小さな気持ち」店主
 2018 年頃より詩作を始める
 月刊誌ココア共和国 佳作掲載多数

受賞の言葉

妻咲邦香

映えある賞を選んで頂きありがとうございます。私は信州安曇野で「小さな気持ち」という名前の手作り専門のお菓子屋さんを営んでおり、毎日シフォンケーキを焼きながら、手休めに詩など書いたりして暮らしています。専門的な事は何も知りません。詩とはずっと友達のような関係でいたいと思っています。時に気難しく又馴れ馴れしく、冷たく接したりもして参りましたが、今回ばかりは肩ぐらいは叩いて褒めてあげたいと思っています。

人のしまつ

中原賢治

もうじき春が来るといふのに

昨日と同じに見える夕陽

老人ホームの片隅から駁り泣く声が

あなたは今も詫びています

詫びても 詫びても

涙が溢れます

涙で過去を償おうとします

何で私なんか産んでくれたのよ

海に捨ててくれれば良かったのにさ

あなたの母への言葉が

ぞつとする悲しみの後姿をつくった記憶に

敗戦の朝鮮海峡を渡る

荒れ狂う波に漂うやみ船のなか

今ならこの子は目が見えていない

そつと海に流してやりなさい

中原賢治

なかはら けんじ

1953年生まれ
立命館大学中退
日本文藝家協会会員
日本現代詩人会会員
詩誌「ひょうたん」同人
詩集「ニンゲン欠乏症」(未来工
房刊)「日本海かぶれ」(未来工
房刊)など多数

子を亡くした他人様の女たちの誘いに
生後一カ月のあなたがいたという

この子の命あるところまで連れて帰る
枯れた乳房を露わに

あなたを守った歴史に
私の葬儀の準備をしてね

危篤状態にありながら
最後の力で酸素マスクを引っ張った

あなたの母が
頭を下げた慄然とした姿に

命だけは自分で決めるしか
過酷な労苦にこそ人が成長するなど

あなたは今日も泣き疲れるまで泣きます
あの人は泣き女だからほっておこう

丸文字の介護録が
昨日どおりに複写される

今日も
老人ホームはゆっくりと闇に包まれる

受賞の言葉

中原賢治

このたび、拙い詩を選んで下さりまして有難うござ
いました。詩らしきものを書き始めて四十年近くが過
ぎましたが、自らの心を漂白するものが書けていませ
ん。これからも詩らしきものを書き続けていこうと思
います。

まだまだ先人たちの素晴らしい詩を読み、新しい発
見を探し求めていきます。決して自己満足せず、常に
疑問符を背に、終末の一瞬まで、新しい自分の詩を綴
ろうと覚悟しています。末筆ながら、関係者の方々に
御礼を申し上げます。



放たれた

「ん」

回収されぬまま

おんなの口角は撓み歪みに忙しなく

西日を受け

小気味よいプラスチック音を連打する

幾重にも増殖する罫線の正義

擬態した正解と囲まれた不一致

空耳に従う垂直な整列

不謹慎な笑みを垂れ流し

明け透けな唄いは天井を競り上げ

耳を塞いだ夢は地中で折れる

重なり

厚くなる緩衝

アクリルを敷く指先は欠け

空の箱は偽名を剝がしあう

肘をつく後頭部に幕は降ろされ

装飾された壁に無口をピン止め

有限を棚卸し

内線は押し黙り

凍てつく膝を笑わせて

盛られた形容を重ね貼り

掲げる言語のうつくし

壁の侵蝕を極める高尚と

木杵を喰らう胞子の鬩ぎ合い

生の前の掛け違い

荒ぶる母性の清潔は

卵膜を選べぬ嬰兒を紐付け

異なる場所へと保存する

巨大な腹を湯舟に浮かべ

裸の王は晒される

やがて

はち切れ

観衆は次へ

終

麻生ゆり



麻生ゆり

あそう ゆり

1967 愛知県生まれ
福岡県北九州市に続き神奈川県に再転勤
転勤生活16年後、今春退職
愛知県に帰郷
第10回～16回文芸思潮現代詩賞奨励賞

受賞の言葉

麻生ゆり

この度は優秀賞に選んで頂き誠に有難うございます。特にテーマを決めることもなく、子供達の成長や職場での出来事、また親の老いなど、その時々々の生活の中で独り言を溢す様に書き留めて参りました。今、読み返してみると随分な愚痴を溢してしまっていたと反省したりすることもございますが、日記のように振り返ることも出来ております。この様な貴重な機会を与えて頂き感謝しております。

挿げ替えられたガーベラ一輪

家主を失くした机の奥で

錆びた王冠たちの

皮算用が始まっている